

グループ1

「オートマジムニー」

登場人物

私: 上田 健太郎、歯科開業医 45 歳、口腔保健センター診療部長

妻: ゆかり、獣医師(県職) 45 歳

長男: 光(ひかり)、附属中学校 3 年生

長女: みつば、附属小学校 6 年生

山本: 歯科衛生士

ほか医科自衛官、看護自衛官

「…んせ、せんせ、せんせ、起きてください。」

とある日、午前の診療を終えて、昼休憩にうたた寝していたところ声掛けで目が覚めた。

「あれ、山本くん。ん、停電？」

「そーなんです。ふっと電気が止まって、うちだけじゃないみたいです。携帯基地局は動いている様で、電波は飛んでいます。どうやら、原発止まったみたいです。復旧のめどは立たないし、原因も調査中だとか…」

「三隅の火力発電やほかの水力発電もダメなのかねえ。ちょっと大事かなあ。山本くん、午後の患者さん調整して、向かってしまった人もあるかもなんで、しばらくは受付さんにいってもらって、平行して訓練の時の様に、まずはスタッフみんなで安否確認の手続きをめいめいでしておいて。」

「あと、歯科衛生士実習生の扱いは専門学校の教務の先生に問い合わせしてくれる。」

「携帯は繋がりにくいんですけど、LINE に学校から指示が入ってます。徒歩で学校のある歯科医師会館まで帰らせて欲しいって。」

「わかった、じゃあそのように実習生に伝えて、一応サバイバルキット、袋ごと渡してくれる。ゆっくり焦らず帰んなさいって。」

スマホを見てみると、各方面から指示メールや LINE が入っている。まずは歯科医師会の安否確認メールに返信と現状報告をして、口腔保健センターの患者さんたちもそれぞれ決められたアクションを実施中とのこと。

附属小中学校の子ども達は今、帰宅中みたいだ。動画を送ってきているけど、大渋滞でほとんど動いてないかあ。

さて妻は、今日は浜田に行ってたはずだけど、LINE の既読がつかねーなあ。

「あとは野津先生ご夫婦の安否確認をして、県歯に報告だな。」野津先生は歯科衛生士の奥さんとお二人でゆっくりと診療を勤しむ、古参の先生だ。スマホを持たず、普段の連絡を FAX などで行っている会員を分担していて、自分は近くの野津先生の安否確認などを代行することになっているのだ。

古かった黒電話を光電話に替えたっておっしゃってたから、電源が落ちたら FAX どころか通話もできないし、古い電話のままだったら通話できたかもしれないけど、後の祭りだな。

「お宅へ歩きで行くしかないか…」

表へ出てみると、ちょうど子ども二人が帰ってきた。

「どうさん仕事で野津先生のところへ行って来るから、中に入ってココアでも作って飲みな。」

「じいちゃん先生とどこ行くんだね。みんな車でどこに行くの？逃げるの？」とみつばがつぶやく。

相変わらず大渋滞、どうやら指示が出る前に逃げようって輩が多いらしい。指示が出たとしても、この界限はまずは自宅内避難のはずなんだけどなあ。

「母さんに連絡取ってみて。LINEの既読がつかんけん。」

ゆっくり歩いて野津先生のお宅を訪ね、ご夫妻のお顔を拝見できた。今朝は、昨夜半の豪風雪もあって雪かきをして、身体の節々にきていたものだから、逆にちょっとほぐれて整う感じが心地よい。曇ってはいるが風はおだやか。気温は1度。大規模停電が起きているからか、とても静かだ。

と、車列からUターンしようとしているのか、歩道に突然車がバックしてきた。積雪で轍と歩道の境界が区別つかず、乗り上げて迫ってくる。後ろが見えてないのか。ちょうど橋の上で、ブラックアイスバーンの上にサラサラ雪がうっすらのってる表面で思わずこけてしまった。

「あいたたた…」車は行ってしまい、ナンバー見る余裕はなかった。左足首やっちゃったかな、折れてはなさそうなんだけど。

野津先生の安否確認ができ、帰るところだったから、まだ良しとしよう。

夜になると、左足首はパンパンに腫れて、ちょっと身体も熱っぽい。スタッフ、その家族も全員安否確認ができ、めいめい三々五々帰宅している。やれやれひと段落だが、妻との連絡がいまだつかない。

夜の9時になると、松江市防災メールや拡声器、消防の車両などから正式に避難指示が出た。道路状況は落ち着いていたが、赤色灯を付けた車両がいたるところで待機していて物々しい。松江市の放射線災害時避難計画に則って、決められた避難地へ居住地区ごとめいめい大移動が始まる。まずは原発に近い鹿島町などの町民(PAZ:5km圏内)が避難開始しているはずだ。この地区は(UPZ:30km圏内)次の指示が出るまで屋内避難をする。

「明日か、明後日か順番が回ってきたら、いつか行ったよね、なんかあったらここに来るんだよって言ってた体育館、覚えてる？」

「浜田の？」とみつば、理由もちゃんと説明してあるから記憶も良い。

「そーそー、そこで母さんとも落ち合えるはずだよ。」

「母さん、またスマホどっかに置いてきてるんじゃない？」と横から光。

確かに妻には前科がある。それも一度や二度ではない。どんなに心細いだろう。

2 日目、自宅の電気は蓄電池が3日分は賄えているので不自由はない。私の携帯キャリアは早くも電波が不安定、飛ばなくなってきた。スマホの電池消耗が早いから機内モードにしておいて、必要な時だけ繋ごう。子ども二人は別の大手キャリアだからかまだ大丈夫そう。SNSにはテロか外国の攻撃か、憶測の域を出ない書き込みが散見されるが、詳細はいまだ不明で調査中の一点張りだ。隠岐全島民が内地へ避難とのこと、海空輸送で避難開始とある。と言うことは放射線災害とは別の理由、他国からの攻撃なのか？

昼頃から、ネットニュースの流れるテロップに何マイクロシーベルトと空間線量が現れるようになった。いよいよか。

3日目朝になると、警察が玄関に来られ、松江市からのパンフレットにある計画通り浜田市に向かってほしいとのこと。出発の準備はしていたが、あとは患者さんのレセコンデータをハードディスクで持って出れば良いはずである。クラウド管理している先生はその点手間が少ない。

まずは中継地(出雲市)を目指し、そこでモニタリングやら除染作業やらされることになる。左足首の具合を救護所で診て貰えるかもしれない。腫れはマックスで、カチカチ、靴紐を相当緩めてはくことになる。ジムニーがATで幸いした。クラッチ操作はまずできないからだ。

中継地では陸上自衛隊がテントを張って救護所を展開していた。助かった。医科自衛官の見立てでは、亀裂骨折とのこと。相当ひねったらしい。子ども二人を車に残しておくことははばかられたので、一緒に来たが、みつばは看護自衛官の石膏ギブス工程に興味津々。光は医科自衛官に質問攻めをする。

「自衛隊の車両ってほとんどオートマなんでしょ。足や手をけがしても運転ができるからだよね！うちのジムニーもオートマなんだよ。だから父さんが運転できたんだよね。」と幾分どや顔。

自衛官さんは子供相手でも礼節を欠くことなく相手をしてくれて「よく知っているね。そーなんだよ。お父さんのジムニーのオートマチョイスはクールだね。」

最終目的地の浜田市総合体育館に到着すると、すぐに妻が現れた。

「ジャングルグリーンのジムニーに白いホイールの組み合わせはすぐわかるわ！」相変わらずサバサバしている。

妻のスマホは牛の後ろ脚に踏まれて壊れてしまったようだ。なるほど、自宅や診療所などの電話番号は覚えているが、スマホの電話番号となるとお互いそのスマホの中に置きっぱなしで覚えていない。そこで、家族のスマホの番号くらいはメモに書いて、お財布の中など別に持つておくべきだったと再確認したことは言うまでもない。

グループ2

私の母は84歳要介護3ではあるが、いまだに一人暮らしをしている。決して交友関係は広くはないが面倒見が良い性格で、昔は常に温かい友人が集っていた。半面、人に何かをしてもらうのは苦手で、息子の私にすら母自身の事で手を煩わせたくないという拘りがある。矯正医として開業している私に「私の身に何かがあっても仕事、患者さんの事を中心に考えて。私の事はどうでも良いから。死に目に会えないのは覚悟しているから。」と何かにつけて言う始末だ。そんな調子なので私もついつい母に甘えが出てしまい、車で5分という近くに住んでいるにも関わらず1、2か月に1度しか実家に顔を出さない日々を送っていた。あの災害が起こるまでは。

「それ」が訪れたのは2年前の8月30日。夏休み中の治療を希望する子供達で医院の中はごった返していた。今日は残業になりそうだなと腹をくりながら遅めの昼食を頬張りながらテレビのニュースを見た。昨夜九州の南海上で進路を北寄りに変え九州を縦断した台風16号が、夕方ごろから中国地方に近づいてくるのだ。高潮警報、波浪注意報も発令されているが、ここ瀬戸内海に面している港町の高松市では高潮注意報、警報が発令されるのは日常の事。今は台風の目の中なのか外は晴れわたり、特別なものの危機感も抱かず午後の診療を再開した。

夜、誰もいなくなった医院に電話が鳴り響いた。台風で雨風が強まっている中、いまだ技工の残業をしている私の身を心配した妻からの電話だった。妻を安心させるため「香川は弘法大師、島根は出雲大社に守られているから災害は起きないんだよ、大丈夫。」なんて軽口をたたいて電話を切った。手元の時計は20時を指していた。その後も仕事を続けていたが、暴風で大粒の雨が窓にたたきつけられる音が時間の経過とともに激しくなってきた。22時頃だったか、なにげなく窓を開け周囲を見渡すと、高松港の方向から、この商店街にひたひたと水が流れ入ってきていた。浸水だ。10分で10cm、30分で40cm、次第に水かさが増してくる。席に戻り残業を続けようと試みたが胸騒ぎが止まらない。ここも危険だ。妻にも避難するよう伝えなくては。そして…次の瞬間ひやりとした。一人暮らしをしている母の事が頭をよぎった。なぜすぐに母の事を思いつかなかったのか、雨脚が強くなってきた時に母に無事を確認する電話をなぜ入れなかったのか、そもそも要介護3になった時に無理やりでも同居したほうが良かったのだろうか、、、とめどなく、猛烈な勢いで湧き上がる不安と後悔の渦に溺れそうになりながら、川のようになった道なき道を無我夢中で車を走らせ母の家に向かった。

家の窓からは一切の灯りが漏れていなかった。合鍵を使い中に入り私は母を探したが、返事一つない。万が一に備えて母に持たせていた「みまもりケータイ」も見当たらない。その代わりに一枚の走り書きのメモを見つけた。「デイの人がきてくれて、ふくしひなんじょに連れていってくれるみたいです。おとなりの田中さんも心配してくれました。だいじょうぶ。住所〇〇〇〇」

避難所に母を見つけた瞬間、安堵で一気に脱力した。一方、母も顔に優しい笑みを湛え目にうっすら涙を浮かべてこちらを見ている。本当に不安だったのだろう。いつも私は大丈夫だからと気丈に振舞っていた母の弱い一面、いや、隠し通していた本当の姿を見た気がして、これからはもっと母の傍に寄り添っていこうと強く思った。

翌日のニュースで、今回の災害の背景が解説されていた。台風による気圧低下と大潮の満潮が重なった事がいまだかつてない浸水被害につながったそう。香川県は災害が少ないからと決めつけず、今後はもう少し自然災害の予兆を敏感に受け止めようと思っている。また、この災害で図らずとも家族の大切さに気付かされた。私はこれまで以上に妻の助言に聞く耳を持つようになり、母の事をもっと気に掛けるようになった。母は相も変わらず一人暮らしをしているが、私はちよちよく安否確認もかねて母に電話をいれ、1週間に一度は必ず会いに行くようにしている。もうそんなに来なくて大丈夫だからと言いながら私を見送る母の顔には、言葉と裏腹にちょっと嬉しそうな表情が浮かんでいる。

グループ3

私は岡山市役所に勤める42歳。これは私達家族が体験した、急死に一生を得たお話である。私には妻と5歳の長男“弘”そして2歳の長女“愛”がいる。長男は普段近隣の幼稚園に通っていて、長女は自宅ではぼ寝たきりで生活している。実は、長女は超低体重児として生まれた所謂「医療的ケア児」なのである。そのため妻はほぼ一日中長女の世話をしており、時々「NPO 法人 につこり」というNICU勤務経験のある看護師さん達が運営している自動車です約10分かかる施設で預かって貰っている。

2023年1月23日(土)19時、岡山市を震度6強の地震が襲った。自宅は半壊し、家族が夕食をとっていた居間はかろうじて現状を留めていた。地震などあまり経験の無い事で妻はパニックになり泣き叫んでいる。やがて停電となり、水道からも水が出なくなった。長女は在宅酸素療法を行っているため急いで電源をバッテリーに切り替えた。バッテリーの容量は6時間分しか無い。携帯電話も繋がらず、5歳の長男は泣き叫んでいる妻を宥めるように「ママ、安心して！僕が皆を守るから！だって僕はヒーロー戦士だもん！！」と、最近どっぷりハマっている戦隊モノのヒーロー気取りだ。

発災から1時間もしないうちに防災無線が鳴り響き、『避難所が開設されました。近隣の避難所に避難して下さい』と放送された。しかし、外の道路は瓦礫で埋め尽くされ、避難所に長女が使用する機器などを持って行くことは難しい。しばらく自宅に留まる事にしたところ、お隣に住む民生委員の方が声をかけに来てくれたが、事情を話し、先に避難所に向かって貰った。

発災後6時間が経過した深夜1時。バッテリーの残量が無くなり、自宅崩壊の危機感もあり意を決し避難所へ向かう事に。幸い外出用の酸素ボンベが2本有り、これを私が背負い、妻が長女を抱き抱えて避難所へ向かった。避難所では深夜にも関わらず、民生委員さんが保健室のベッドを準備し迎えてくれた。酸素ボンベは合わせて6時間ももたない。妻は長女の手を握り何やらぶつぶつ言っている。長男もその妻の背中にもたれかかったまま眠ってしまった。私は万一を考えアンビュマスクを握りしめている。外部からの支援を待ちながら夜を明かしたそんな時だった。「愛ちゃ～ん」「愛ちゃ～ん」という聞き慣れた声。「NPO 法人 につこり」の“加美”さんの声だ。酸素ボンベ2本を背負い瓦礫が散乱する中、歩いてやって来てくれた。ちょうど手持ちの酸素が尽きるタイミングだった。

窓に目を向けると朝の光が差し込み、救急車のサイレンが近づいているのが分かった。

グループ4

最近の夏は堪える…

毎年誰かに愚痴ってしまうが、86歳にもなると本当にしんどくてたまらない。

数年前に膝を悪くしてからは、ほとんど家から出ることもできなくなってしまった。

こんな暑い日はなおさらだ。

気候が良ければ近所に買い物ぐらいはゆっくり歩けば何とか行けるが、先日の買い物では今の夏の暑さで「外をゆっくり」なんてとんでもない行為だというのを痛感した。

「母さん！今日は兄さんの好きなかしわを玄関に置いておくから腐らせないでよー」

先日の買い物帰りに道端で動けなくなり、救急車で運ばれるハメになってしまったため今では近所で店をやっている下の息子が毎朝食材なんかを置いて行ってくれるようになった。

ただ、店のことが忙しいのかサッサと行ってしまうため、すぐに顔も見に行けないこの足が恨めしい。

今日も猛暑日だ。

なるべく涼しい時間に洗濯物を干してしまわねば。

えっちらおっちら洗濯や掃除など済ませていたら、気づけばもう夕方だ。

今日は息子がかしわを持って来てくれていたので、それを炊こう。

一緒に住んでいる上の息子は炊いたかしわが好物なのだ。

「ごはんできたよー」

2階にいる息子に夕食を持って行くが、これがまたしんどい。

上の息子は53歳なのでまだまだ結構よく食べる。

重いお盆を持って階段をスルスル上がるなんてもうできない。

お盆を上段に置いては一段上がり…またお盆を上段に置いては一段上がり…を繰り返す。

ようやく2階にたどり着いた時には汗だくになってしまっていた。

「母さん、ありがとう」

上の息子がいつもの場所に座っている。その目には私の顔は見えていない。

全盲というのだそう。

20年前から今の家に2人で暮らすようになったが、当時階段を踏み外して落ちるのがこわかったので上の息子は基本的に2階だけで過ごすようにした。

その時は私もまだ60代で元気だったから2階まで行って世話するのも何ともなかったが、今のようになり膝を痛めてからは2階に上がるのにとっても時間がかかってしまう。

今後は上の息子にも1階で過ごしてもらおうようにした方が良くかもしれない。

「母さん、なんだか雨が降りそうだね。」

言われてみれば、あたりが急に薄暗くなって空気が湿ってきているようだ。

「あらやだ、洗濯物をまだとりこんでなかったわ。最近の雨は降りだしたらすごい勢いだから早く取りに行かなきゃね。」

上がったと思ったらまた下りだ。また夜に膝が腫れるだろうか…。

夜になっても雨が止む気配はなく、だんだんひどくなっている。

なんとなく心細いものを感じていたら、いきなり警報が鳴りだして飛び上がった！

携帯電話もけたたましく鳴っている。

テレビでは、ニュースキャスターの人が真剣な顔で「命を守る行動を！」と言っている。

頭が真っ白になってあたふたしていると、下の息子から電話がかかってきた。

「母さん、どうやら大雨で川が氾濫しそうになっているらしい。そっちは大丈夫？」

「大丈夫？っていわれてもどうしたら良いか分からないよ。避難所に行った方が良いんかねえ？

でも、A 小学校まで歩いても私の足じゃ 50~60 分かかるし、お兄ちゃんも一緒じゃもつとかかつちやうよ」

避難所といえば小学校や中学校だろうが、一番近い小学校でも私の足では一時間近くかかるし、この雨のなか全盲の息子の手を引いて歩くなんて気が遠くなる話だ。

「うーん、確かに歩いている間に冠水してきたら危ないよな。うちも子供たちを塾とかに迎えに行かなきゃいけないから、すぐそっちに行くのも難しいし…。とりあえず 2 階に上がった方が良さかも。」

「大丈夫かねえ。2 階って言ってもそんなに高くないし、布団持って上がるのも大変なのよ。」

「何言ってるの！布団なんて兄さんと同じのを使わせてもらえば良いじゃない！とにかく最低限の物だけ持って早く 2 階に避難して！」

できたら色々と大事な物を 2 階に持って上がりたいところだが、そんなことをしていたら何時間かかかってしまう。

しょうがなく私は財布だけ持って 2 階に上がった。

「どうなってるの？なんかさっきいろんなところですよ音が聞こえたんだけど！」

2 階では上の息子が興奮状態になっているようだった。

「どうも大雨で川が氾濫しそうなんだって。さっきからテレビで避難してって言ってるんだけど、あたしが外に出たらかえって危ないかもしれないからどうしたら良いのかと思ってねえ。」

外では雨風がさらに激しさを増しているようだ。ゴウゴウと音が聞こえてくる。

本当にこの行動で良かったのか不安でたまらないけど、今更自分達で外に出るわけにもいかない。

一晩中雨は降り続き、息子も不安で眠れないようだ。

夜中にちらりと 1 階の様子をみると家の中まで水が入ってきているのが見えた。

おそろしくてたまらない。

携帯電話で下の息子に電話をするも、一向に通じない。

おびえながら過ごすしかなかった。

まんじりともせず迎えた朝は、ある程度雨は小止みになっているようだったが降り続けている。
1階を覗いてみると、あちこち泥だらけでこのままでは自分達だけで下に降りることもままならない状況だった。

しばらくして、ようやく下の息子と電話がつながり、避難所に送って行ってくれることになった。

とにかく2階から動くことができホッとしたが、またそれからが大変だった。

なにせなにも準備できていないのだ。

泥だらけの1階から被害を免れた着替えやタオルなどを持って、何とか避難所につれていってもらったがどこに行ったら良いかもよく分からない。

「あらナツコさん、あなたも来てたのね！息子さんのこともあるし、しばらく前に膝を悪くしたって言ってたから心配してたのよ。下の息さんが連れてきてくれたのね。よかったわあ。」

中には以前よくおしゃべりしていたご近所さんの顔もあって心細いなりになんとか落ち着けたが、上の息子は周囲のことが全然分からない状況でずっと緊張が解けないようだ。

まだお昼にもなっていないのに、クタクタになってしまっていた。

そうして、私たちの避難所生活が始まった。

ありがたいことに避難所では炊き出しなどもあり、食事等はそんなに心配しなくてもよさそうだ。

しかし、体育館の端に陣取ってしまったためにもらいに行くだけでも大変だ。

初日のお昼は下の息子がもらいに行ってくれたし、時には顔見知りのご近所さんがもらってきてくれたが、やはり何日も過ごしていると周りの人にもお願いしてばかりも気が滅入る。

下の息子も仕事や家族のことがあるし、ご近所さんにいつも頼るわけにはいかない。上の息子の分と二人分になるので、お弁当と飲み物が合わさると私には結構な負担だ。先日もお昼ご飯をもらって息子の所に戻っている途中で転んでお弁当をぶちまけてしまった。

上の息子も慣れない環境で食べにくいのかよくこぼしてしまい、折角の食料をしょっちゅう無駄にしてしまうのも気が滅入る要因だ。

転んだ拍子に腰を打ってしまい、今は余計に歩くのがつらい。

トイレも遠いので行くのが大変だし、上の息子は一人で行くのが危なっかしいため連れて行かなければならない。

息子もかなりのストレスのようで、なるべく水分を取らずにトイレを我慢している。

今日は朝からだるそうに見える。もしかして熱中症というやつだろうか。

心配になり、ご近所さんに相談してみたら避難所の人のところに一緒に相談に行ってくれた。「行政」の人がいるのだそうだ。

そこで、息子の状態や全盲であることなど、自分も体の痛みで避難所生活が厳しいことなどを話すと「福祉避難所」というものがあるということを知ってくれた。

なんでも、避難所で生活することが困難な高齢者や障がいのある人が配慮を受けられる避難所というのだ。

そのことを知っていて、もっと早くに相談できればこんなにつらい思いを続けなくても良かったのに…。もっと言うなら、先に息子たちと災害が起こったときのことを相談して準備できていれば、ここまで不安な毎日を過ごさなくても良かったかもしれない。

情報がすべてだ

グループ5

それは突然の出来事だった。

テレビから流れてきた緊急地震速報につづいて地鳴りのような音がした直後、突き上げるような衝撃が襲ってきて八十数年の人生で体験したことのない揺れが数分間続いた。いや実際は30秒程度だったかもしれないがとてつもなく長い時間を感じられた。

時は2023年1月21日土曜日、19時30分を少し過ぎたところだった。

妻は毎週日曜日の早朝、近所の小学校のグラウンドでグランドゴルフを楽しんでいる。今日は曇りだったが明日は晴れの予報だったので早朝の楽しみに備え、いつもより早めの食事を終え、片付けも終わり、コタツでくつろいでいるところだった。

台所に目をやると棚は倒れ食器が散乱していた。いつもなら妻も巻き込まれていたかもしれないが、居間にいて良かったと思った。

私は60代後半で患った脳梗塞による後遺症で右麻痺があるため、人の助けがなければ歩行できないため、妻の助けを借りて倒れたテレビや家具を避けながら玄関に向かった。麻痺のある体をこれほど疎ましく思ったことはなかった。

何とか玄関までたどり着いたが、地震により柱が傾いているのか引戸が開きにくかった。悪戦苦闘していると「佐藤さん、大丈夫ですか」と外から声が聞こえた。隣に住む60代の衛藤さん夫婦が心配して助けに来てくれたのだ。衛藤さんの助けで玄関戸も半分ほど開き、外に出ることができた。

どこに避難してよいかわからず迷ったが、とりあえず衛藤さんの車に乗せてもらい、市役所に行くことにした。

大分県南部に位置するこの街は南海トラフ地震による津波被害も懸念されているが、衛藤さん情報によるとこの地震では津波の心配はないとのこと、震度は6強だったそうだ。携帯だかスマートフォンだかから得られる情報は便利なものだと改めて思った。妻も私も今まで必要に感じたことはなかったが、今後買ったほうが良いのかもしれないとその時思った。

市役所に着いて駐車場の時計を見ると8時を少し過ぎたところだった。温度計も7℃になっており、急に寒さを感じはじめ、慌てて出てきたため二人とも上着を着ていないことにその時気づいた。市役所の玄関は少し薄暗い状態であったがすでに50名程度の人が避難していた。とりあえずロビーにある長椅子に四人で座ることができ、衛藤さんの車にあったブランケットを貸してもらい少し落ち着くことができた。

市の職員によると市役所は避難場所ではないらしいが、今晚は市役所内の会議室を開放してくれるとのことだった。

水、クラッカー、毛布とアルミマットが支給され、市の職員が私の体を心配してくれて長椅子も運んでくれた。

その夜は不安と興奮であまり寝ることができず、長い夜を過ごした。

翌朝、福岡に住む息子に連絡がとれ二人とも無事であることを伝えた。自宅に何度も電話をかけたが繋がらず心配したとのことだった。

今日は市役所前にある市の体育館に移ることになり、誘導されていくと体育館内に沢山のテントが張られており、中にそれぞれ段ボールベッドが設置されていてびっくりした。トイレに近い場所も確保しておいてくれて、その配慮に感謝しなかった。

あとで知ったのだが、私のように障がいがある者などを対象に福祉避難所というものがあるらしく、この周辺では老健施設などが受け入れてくれるらしい。今回はどこもすでに受け入れが困難らしく、避難所での対応になりますと申し訳なさそうに市の人が話してくれた。

避難所での食料はあったが、ご飯も硬くおかずも大きいため、食事には苦労した。日頃、妻の作ってくれる食べやすい食事に改めて感謝した瞬間であった。

その後数日避難所で過ごした後、福岡の息子のところにお世話になることになった。

自宅は古く、避難の際にも戸が開きにくくなったほどなので住み続けるにはかなりの不安があったので、息子の提案は本当にありがたかった。長男が大学進学で家を離れているため部屋は空いており、とりあえず問題ないとのことだった。

福岡に暮らしてみるとリハビリ環境・サービスも充実しており、デイケアに行くことで妻の負担が減り、妻も大分に暮らしていた時よりイキイキしているように見える。こちらでもグランドゴルフ同好会を教えてもらい楽しく通っている。

息子夫婦と中学生(次男)の孫との暮らしも老夫婦二人暮らしにはなかった張りをもたらしてくれている。禍を転じて福と為すといったところか。

グループ6

私は、幸恵 70 歳、宮崎県都城市内からは外れた山あいの一軒家に、夫と紀州犬のコタロウと暮らしている。

夫の歳三は、今年で 75 歳になる。

夫は、5 年ほど前に医者から軽度の認知症と診断され、最近では、記憶がはっきりしない時間が増えてきた。

42 歳になる息子は、宮崎市内で働いており、月に一回ほど顔を見せに来る。

3 年前まではサツマイモ農家を営んでいたが、夫が認知症と診断されたこともあり、今は自分たちが食べる分程度の野菜を作りつつ、余分に出来た分は近所の道の駅に出荷している。

今日は 2023 年 6 月 30 日の夜、この 1 週間ずっと雨が降り続けている。

梅雨の長雨で、外に出られない日が続いていて、夫はストレスからか、認知症の症状が強くなっている。

夕食を終えて、お風呂の準備をしていたところ、ドドドドドドオオオオオオという大きな音が聞こえてきた。

その直後、家全体が物凄い衝撃に襲われた。

あまりの出来事に、何が起きたのか全く理解できなかったが、気が付くと、家の中には大量の土砂が入り込んでいた。

このとき、自宅の裏山が崩れたことを知った。

幸い、夫とコタロウは無事だったが、夫は、家が崩れた際に家財道具が当たったため、複数箇所ケガを負っているようであった。

夫は何が起きたのか分からず、ひどく混乱しているようであった。

すぐに携帯電話で、119 番通報し、救助を求めたところ、救急車が途中まで来てくれたが、土砂崩れの影響で、道路が寸断されており、家まで来られないとのことであった。

夫のケガが心配なため、何とかならないかと相談したところ、消防からヘリコプターが出動することになった。

夜間、雨が降るなか、かなりの時間を要したが、救助隊員が状況を理解できずに暴れる夫を抱えながら、何とか無事にヘリコプターに全員乗ることができた。

ヘリコプターは市内にある国立病院機構都城医療センターに移動し、夫はケガの治療を受けることができた。

私もずぶ濡れで、着の身着のままだったこともあり、その日は、医療センターの病室で一晩過ごした。

7月1日、一夜明けて、やっと市内の被害状況がわかってきた。

土砂崩れは複数箇所発生していて、山あいに住む数十世帯が避難生活を余儀なくされそうということであった。

自宅は半壊し、もう家に帰ることはできない。

7月3日に、何とか一時帰宅することができ、通帳や印鑑といった大事なものだけは回収したが、家と家財道具はあきらめざるを得ない。

夫は認知症があるため、市が開設した福祉避難所:特別養護老人ホーム「ひだまりの丘」に入ることになった。

私は、コタロウがいるため、夫とは別れて、市が市民センターに開設した避難所で、しばらく生活することになった。

避難生活が始まって3日後、市職員の浅野さんから、夫が暴れて困っているとの話を聞かされた。私は、浅野さんに、「夫は一人で不安なんだと思います。私と一緒に落ち着くと思います。」と伝えた。

コタロウを宮崎市内の息子に預け、「ひだまりの丘」に向かうと、夫は、私の顔を見て、安心したのか、落ち着きを取り戻した。

2週間後、息子からの提案もあり、「申し訳ないな」と思いながらも、息子の家に夫婦で居候することを決め、やっと落ち着ける居場所を確保することができた。

息子の家に身を寄せてから1か月程経ち、今後のことをどうするか思い悩んでいたところ、会社勤めのサラリーマンである息子が、「親父の認知症が心配だし、お袋だけで面倒見るのも大変だろうから、俺が農家を継いで、実家を建て直すことにした。」と言ってくれた。

涙が止まらなかった。

災害が起きてから1年後の2024年7月1日、復旧した道路を車が通っていく。

車がたどり着いた先には、新築したバリアフリーの二世帯住宅があった。

今日から、夫と息子夫婦、孫、コタロウの家族6人と1匹での新しい生活が始まる。

グループ7

「もう一度宮古島に連れて行って！」

妻に先立たれた私は1人暮らしで、数年前に脳梗塞のため左側にマヒが残っている。定期的に娘が訪ねて来てくれることを楽しみにしている。

リハビリのため、昔のアルバムを眺めてことがあり、家族で行った沖縄の宮古島の旅が懐かしく感じる。あの海をもう一度見たいと。

ある日、訪ねてきた娘に「のぶちゃん、もう一度宮古島に行きたいなあ。連れて行ってくれんか？」と頼んでみた。考えさせてという返事が返ってくるだろうと思っていた矢先に、「わかった。みんなで行こう！」と返事が帰ってきた。内心とてもうれしかった。

羽田空港から宮古空港へは直行便があり、2023年1月20日から私と娘、孫2人の4人で家族旅行が実現した。ホテルは海が見える東急リゾート、私が車椅子のためレンタカーの手配もしてくれた。

翌日、島内観光とへと向かい、途中大好きな沖縄そばを食べるために、そば屋の前で並んでいた。正午ごろ携帯電話の緊急地震速報の通知音が鳴り響き、震度6強の地震が発生し、津波警報が発令された。沖縄そばの香りが漂う店頭から家族で避難することになった。

旅先での緊急事態、ホテルは海沿いのため、戻ることを諦めて高台へ。しかし見知らぬ土地での避難は困難極まり、ましてや車椅子の私を連れての避難は厳しいだろうと考え、他の3人を避難させて私は残ることも考えた。しかし、娘の提案で知らない土地で徒歩で避難しても行き先が分からないからレンタカーでナビを頼りに避難することになった。

宮古島は平坦で高台らしきものが目に入り向かうことに。

どうにかたどりついた場所は、自衛隊基地であった。自衛隊も緊急事態であったが、私が脳梗塞の後遺症があることから、要配慮者として受け入れていただき難を逃れることができた。